

フランコ・ファジョーリ CD「イル・マエストロ」/ポルボラ・アリア集

【収録曲】

- ニコラ・ポルボラ(1686-1768):
 ①『エツィオ』より「もしあながたが空飛ぶ鷺を導くなら」
 ②『認められたセミラミデ』より「私の苦しみをきいてほしい」
 ③『捨てられたディードー』より「嵐が迫り」
 ④『メーリーとセリヌンテ』より「心乱れて」
 ⑤『認められたセミラミデ』より「4月が訪れるなら」
 ⑥『イル・ヴェルボ・イン・カルネ』より「天よ、慈悲を垂れたまえ」
 ⑦『メーリーとセリヌンテ』より「果敢な心で」
 ⑧『イル・リティーロ』より「愛しの沃野よ」
 ⑨『ボリフェーモ』より「愛するひとを待ちながら」
 ⑩『ボリフェーモ』より「至高のジョーヴェ(ジュピター)」
 ⑪『禿頭のカルロス』より「いつも雲に覆われて」
 ⑫『イル・ヴルカーノ』より「誰が彼をこれほど愛しているか知らせたもうな」

フランコ・ファジョーリ(カウンターテナー)
アカデミア・モンティス・レガリス(オーケストラ)
アレッサンドロ・デ・マルキ(指揮)

録音時期: 2013年6月
naïve V-5369

ニコラ・ポルボラという作曲家をご存知だろうか? ポルボラ(1686-1768)はバッハやヘンデルと同時代の作曲家で、有名なカストラートのファリネッリ、カッファレッリやハイドンの恩師でもあった。つまり彼はカストラートが活躍するオペラを数多く作曲した人なのだ。美しいメロディ・ライン、歌謡性に富んだ親しみやすさが特徴である。こんな言い方をすると飽きっぽい低俗な音楽と思われるかもしれないが、ここにあげたファジョーリのCDをぜひお聴きいただきたい。

なぜ、ポルボラは知られてこなかったのか。おそらく歌える歌手がいなかったからだろう。ファジョーリを聴くと、18世紀のカストラートたちはこんな歌唱をしたに違いないと確信してしまう。カウンターテナー界に彼のような凄い歌手が出現したからに他ならない。広い音域を凄まじいスピードで上下する力量はもちろん、テンポが遅い作品にあっては恐ろしいまでに甘美、多彩、深淵で聴き手の心底にグッと滲み入ってくる迫力にただただ圧倒される。全12曲80分、すべてすばらしい作品と演奏だ。筆者はこのCDに出会い、生きていて良かったと心から思った。

ファジョーリの3オクターヴを聴きたいのであれば11曲目の最後のカデンツァを。痛快ですらある。

10曲目の「至高のジョーヴェ」は、ポルボラ作品の中で最も有名だろう。映画「カストラート(ファリネッリ)」の終盤、皆既日食が起こり、ファリネッリの兄が手首を切るシーンで流れたあの曲だ。ファジョーリの歌唱はこの曲を見事に掴みきっていると言えよう。

オーケストラは、アレッサンドロ・デ・マルキ率いるアカデミア・モンティス・レガリス。決して出過ぎず絶妙な配伴でファジョーリの歌唱を好サポートしている。



さて、この「ポルボラのアリア集」よりも、「カッファレッリのためのアリア集」(V5333)が発売された。これまたファジョーリの凄まじいアリタが満喫できるCDなのだが、こちらは品切れである。制作したCD会社naïve(ナイーヴ)は昨年夏に倒産し、ベルギーのBelieveという会社に買収されたとのこと。このBelieveが再プレスしてくれることを信じるしかない。日本の輸入元、キングインターナショナルによれば、「ポルボラ」の方は、ベルギーにほんのわずかだが在庫があるそうである。しかし、こちらも無くなってしまうのは時間の問題であろう。(2017年6月現在)

フランコ・ファジョーリ(CT)&ヴェニス・バロック・オーケストラ

2018年日本公演

- 11/18(日) 14:00 開演 兵庫県立芸術文化センター大ホール
 11/20(火) 19:00 開演 福岡シントニーホール(予定)
 11/22(木) 19:00 開演 東京オペラシティコンサートホール **4/10(火) 一般発売**
 11/23(金) 15:00 開演 イタリア文化会館アニエッリホール(ヴェニス・バロック・オーケストラのみ)
 11/25(日) 15:00 開演 水戸芸術館(予定)

[曲目] ヘンデル: 歌劇『アリオダンテ』より アリア「不実な女、戯れよ」「暗く不吉な夜が過ぎると」
 歌劇『リナルド』より アリア「愛しい花嫁よ」「風よ、旋風よ」
 歌劇『アルチーナ』より アリア「愛する人の姿が」 ほかを予定

◆公演のお問い合わせ先 Tel: 03-5216-7131 アレグロミュージック

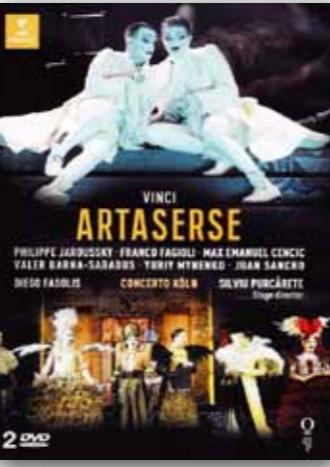
ここにご紹介させていただいたCDとDVDを各2,500円+送料360円、合計2,860円(税込)にて販売させていただきます。どちらも輸入盤ですので、弊社で簡単な作品解説書(A4二つ折り)を作成しました。それをお付けいたします。

CD「ポルボラのアリア集」は加藤浩子氏、DVD「アルタセルセ」は水谷彰良氏にそれぞれ解説をお願いしました。(歌詞対訳までは作成していません)
 この機会にぜひお買い求めください。

お申し込み先: アレグロミュージック (03)5216-7131

info@allegromusic.co.jp

http://www.allegromusic.co.jp



DVD 歌劇「アルタセルセ」レオナルド・ヴィンチ作曲

フランコ・ファジョーリ(CT)
 フィリップ・シャルスキー(CT)
 ヴァレア・サバドウス(CT)
 マックス・エマヌエル・ツェンチッヒ(CT)
 ユーリイ・ミネンコ(CT)
 ホアン・サンチョ(Ten)
 シルヴィウ・ブルカレーテ(演出)
 ディエゴ・ファソリス指揮
 コンセルト・ケルン

(2012年11月、ローレンス国立歌劇場ライヴ収録)
ERATO 46323234(2枚組)

オペラ・セリアで最も著名な作家、メタスターの台本に、ナポリ楽派のレオナルド・ヴィンチ(Leonardo Vinci/1696-1730)が作曲したバロック・オペラ。フランスのナンシーで行なわれたライヴ映像である。出演歌手はなんと全員男性。しかも、カウンターテナー歌手が5人!!あと1人のテノールがいて、計6名。女性役はもちろんカウンターテナーが演じる。壯觀である。緞帳は降りておらず、両サイドに複数の化粧台が見える。序曲が開始されると顔を白塗りにした6人が思い思いのペースで舞台中央へと集まってくる。バスロープ(白色は女性役)やTシャツ姿といったかなりラフな格好だ。カメラ目線で手を振る歌手もいる。そろい踏みか。筆者は歌舞伎の白浪五人男を連想した。歌手のほかに黒衣がいる。こちらはみんな女性。

白眉は第1幕最後、ファジョーリ扮するアルバーチェのアリアだ。この場面はYouTube映像でも観られる。とにかくにもファジョーリのもの凄い歌が圧巻だ。驚愕せざるを得ない。顔は歌舞伎の限取りしたかのよう。弊社の女性スタッフの一人が、この場面を観て「海老ぞお~!」と大声で叫んでいた。屋号気分か!? そういうえば、このオペラが初演された時代、日本では歌舞伎が全盛期へという時代である。歌舞伎役者も男のみ。演出のブルカレーテ(ルーマニア出身だそう)は当然、歌舞伎を意識しての演出だろう。

このDVD映像が振るっているのは、ハリウッド映画DVDによく特典として付いているメイキング映像のようなものが、ときたま同時進行で挟まれることだ。例えば1幕最後の場面、紙吹雪の入ったバケツと脚立を持って中央へ移動する裏方(黒衣)や紙吹雪を撒くタイミングのキューチ出しをするディレクター(?)が、紙吹雪がうまく舞つて大笑いする姿までが映し出される。さらに傑作なのは、1枚目のDVD映像が切れる場面。第1幕が終わり紙吹雪で散らかった舞台上をデッキブラシで掃除するシーンのアップで終わるのだ。なんと粹というかオシャレ、遊び心満載である。

それにしても、5人のカウンターテナーが次々と歌うのだ。それも超一流の連中ときている。ファジョーリはもちろん、ツェンチッヒやシャルスキーもみんな好演。アルタセルセの恋人、セミーラを演じるサバドウス(いちばん若い)は、背がもっと高く細身でパリコレ・モデルのよう。八頭身、いや十頭身ありそう。女性役には背が高すぎるけれど、彼女の(オット失礼!)彼の振舞はチェンチッヒ共々なかなか美しい(?!)もちろん声も美しい。オーケストラ・ピットに入って熱演を繰り広げるコンセルト・ケルンもめちゃくちゃ上手い! 感動的だ。

残念なことは日本語字幕がないこと。英、独、仏、伊のみ。物語の筋がわからない方は、事前にネットで調べることをおすすめする。「ファジョーリ、アルタセルセ」でググれば、多くの熱烈な爱好者の方々が懇切丁寧に説明してくださっているので、それらを教科書にすれば、細かい内容まで掴むことができる。



ファジョーリと人気を二分するスター歌手。品格ある声にファン急増。

ヴァレア・サバドウス with コンセルト・ケルン 2019年2月来日決定。

- 曲目:
 ヘンデル: 歌劇『セルセ』よりアリア「オン・ブラ・マイ」
 ヘンデル: 歌劇『リナルド』よりアリア「愛する花嫁よ」「風よ、旋風よ」
 ポルボラ: 歌劇『ボリフェーモ』よりアリア「至高のジョーヴェ」
 ほかを予定

◆公演のお問い合わせ先 Tel: 03-5216-7131 アレグロミュージック